

沖縄県佐敷町の第一尚氏史跡群とその伝承

原 田 信 之

(日本文学)

琉球の歴代王統のうち、第一尚氏王統の始祖に関する伝説は伊平屋島から佐敷に渡ってきたという鮫川(佐銘川)大主の話に始まる。伝承によれば、屋蔵大主の息子の鮫川大主は、伊平屋島を出て場天の浜(佐敷町)に渡ったという。やがて鮫川は大城按司の娘の簪になり、男子苗代大親(尚思紹)と女子(場天ノ口)が生まれ、この苗代大親の子が成人して尚巴志となり、三山を統一して第一尚氏王統をたてたとされる。このため、佐敷町には、第一尚氏一族にまつわる史跡も多く、第一尚氏王統にまつわる諸伝承が濃密に伝えられている。本稿は、新たに採集した口承資料などの検討を通して、佐敷町の人々の間で語り継がれてきた第一尚氏関連史跡群とその伝承の全体像をまとめ、残存資料の少ない琉球王朝始祖伝説の一面を考察した。

はじめに

『中山世鑑』(一六五〇年成立)、『中山世譜』(一七二五年成立)等の

琉球の正史によれば、琉球の歴代王統は、神話時代にあたる天孫氏時代を除外すると、舜天王統(一一八七―一二五九)以降、英祖王統(一二

六〇―一三四九)、察度王統(一二三三―一四〇五)、第一尚氏王統(一四〇六―一四六九)、第二尚氏王統(一四七〇―一八七九)と続いた。

この琉球の歴代王統を日本本土の歴史と対照させると、舜天王統から第

二尚氏王統前期まではほぼ日本の中世に相当し、第二尚氏王統後期は日本本土の近世に相当する。

これらの王統のうち、本稿では、佐敷の第一尚氏関連史跡群とその伝承を中心として扱う。佐敷には、伊平屋列島から渡った鮫川大主や、鮫川の子の尚思紹(？―一四二二)。在位一四〇六―一四二二)、鮫川の孫の尚巴志(一三七二―一四三九。在位一四二二―一四三九)など第一尚氏始祖たちまつわる伝説が伝承されており、第一尚氏に関連のある史

跡も多数残存している。民間伝承の世界における始祖たちの有様は実に生き生きとしており、聞く者の心をとらえてやまない。文献資料からはうかがえない生々しい始祖たちの活躍の有様から、我々は、多くのことを学ぶことができるであろう。これらの民間伝承資料は、史実と虚構の間であり、資料的位置づけが極めて難しいため歴史的資料とみなすことはできないが、これらの民間伝承の背後には何らかの意味が隠されている可能性がある。しかし、これらの民間伝承は、いずれ消え去る運命にある。現に、筆者が調査した限りにおいて、大半の話者の方が語った始祖たちの話は断片にすぎず、現時点で既に調査は極めて難しい状況にある。採集不可能となる前に、現時点での残存資料の総まとめをしておく必要がある¹⁾。

第一尚氏王統の始祖である鮫川大王が生まれた地とされる伊平屋列島は、沖縄本島北部の本部半島の北方海上約三〇キロに位置しており、伊平屋村に属す伊平屋島・野甫島と、伊是名村に属す伊是名島・屋ノ下島・屋那覇島・降神島・具志川島とを合わせて大小七つの島々からなり、かつては「伊平屋のななはなり（七離れ）」と呼ばれ、伊平屋島とも総称された²⁾。この伊平屋列島の、伊平屋島から第一尚氏、伊是名島から第二尚氏の始祖が出た。また、第一尚氏王統始祖鮫川大王が渡った地とされる沖縄本島南部の東海岸に位置する沖縄県島尻郡佐敷町は、標高一五〇メートル余りの台地と標高一〇メートル以下の海岸低地からなり、台地が円弧状に連続して馬天港を抱く形になっている。第一尚氏王統の始祖たちはこの佐敷の地を基盤として勢力を伸ばし、やがて尚巴志が三山統一を達成することとなる。

これまでに筆者は第一尚氏始祖伝説に関して、伊平屋列島における始

祖伝説の実態と佐敷における始祖伝説の実態についてまとめた³⁾。それらの成果をふまえて、本稿では、新たに採集した口承資料などの検討を通して、佐敷町の人々の間で語り継がれてきた第一尚氏関連史跡群とその伝承の全体像をまとめ、残存資料の少ない琉球王朝始祖伝説の一面を考察することを目的とする。

1 鮫川大王関連史跡と伝承

琉球の正史によれば、第一尚氏王統は伊平屋島で生まれたとされる鮫川大王を遠祖とする。『中山世譜』巻四「尚思紹王」の項には「思紹之父。名叫鮫川大王。乃葉壁人。移居于作敷間切。新里村。場天之地。遂娶大城按司之女。生一男一女。其男思紹也。女叫場天祝。」と記されている。この記述から、第一尚氏第一代尚思紹王の父は伊平屋島の人（葉壁人）で「鮫川大王」と称された人物であったこと、鮫川は佐敷間切新里村場天の地に渡ってきて大城按司の女と結婚して一男一女が生まれたこと、そして男子は尚思紹となり女子は場天ノ口となったことがわかる。なお、鮫川大王の表記は、伊平屋列島では「鮫川」、佐敷では「佐銘川」とされる場合が多い（本稿では主として「鮫川」を使用した）。

正史には記されていないが、鮫川大王が生まれたとされる伊平屋列島で調査すると、鮫川大王の父とされる「屋蔵大王」に関する伝説が濃密に伝承されている。伊平屋島の我喜屋集落には屋蔵大王の屋敷跡とされる土地や、屋蔵大王にまつわる種々の伝承があり、我喜屋の海岸の岩場

には「屋蔵墓」と称される墓がある。伊平屋列島の伝承では、屋蔵大主は伊平屋の出身ではなく、沖縄本島あたりから渡ってきたらしいと伝えられていたが、屋蔵大主の出自は不明であった。ところが、鮫川大主が渡った佐敷で調査すると、屋蔵大主は南山系の人物で、その父は与座グスク（城）に住んでいた「上与座按司」であったという伝承が残存していた。佐敷の伝承によれば、権力闘争によって父の上与座按司が兄に殺害されたため、屋蔵大主は伊平屋島に逃げたという。つまり、佐敷で伝承されている第一尚氏の系譜は、

上与座按司（？）——屋蔵大主——鮫川大主——尚思紹——尚巴志

ということになる。鮫川大主の父とされる屋蔵大主や祖父とされる上与座按司に関する伝承は正史には全く記されていない。第一尚氏の出自の問題を考える際、屋蔵大主や上与座按司の伝承の存在は極めて大きな意味を持つことになり、注目される。

次に、佐敷で採集した鮫川大主に関する伝承事例を提示する。

〈事例1〉「鮫川大主」

鮫川も、向こう（伊平屋島）で生まれて、向こうで育って豪農になっただけです。その後、鮫川の時代になって、やっぱり、篤農家というんですかね、豪農というんですか、そういう感じで、大富豪になった。そして飢饉の年に、百姓たちに米を分け与えたそうですが、人間ていうのはちょっと困って来ると、欲はきりが無いもんで、

「もつとくれもつとくれ」と、いう要望を出したと。そうすると、鮫川はですね、

「食べ物というのは非常に大事なもので、飢饉が来ると、その時の食料の準備もしておかんといかんからある程度蓄えが必要だから、少しずつ

にしてくれ」と言ったら、島民たちはそれに不満だったわけですね。

「もつと取りたいもつと取りたい」と言うんだがその、少しずつ与えておつたと。それで、島民たちは、「こいつを殺して、全部取るうじやないか」ということになったらしいんですが、ある年寄りが現れて、夜、その家に尋ねてきてですね、

「あなたはねらわれておるから、危ない」と、いうことを言ったんで、島を逃げるわけですよ。で、浜辺に来て浜辺から、小舟に乗って出ようとするところまで、追っかけてきたそうですが、まあ、難を逃れて。

この、鮫川が、島を脱出した後の、話なんです。これが色々ありましてね。あの、宜名真（ぎなま）という所に着いたと。国頭村です。そこで、しばらく暮らしておると、「お前の住む所は、こっちは永住の地ではなくして、新しい所へ行くべきだ」ということなんです。まあこの、流れてきたということについてもですね、宜名真説とか本部町のウエマ、とか色々、話があるわけですけど、まあ一応、宜名真が主力ですから。で、「あんたの、住む所は、港を出て、北の方を回ってですね——北とって国頭の半島ですね——、あれを回って、東の海岸に出て、三方が、山のように囲まれた所。そこがあんたの安住の地だ」と、言われたんでそこを回って、北の方のあれを回って東海岸を通ってきて、中城湾（なかぐすくわん）と言いますけれども、そこに来たら、三方を山に囲まれた所があると。それが佐敷だったわけですね。これは神様か何か出てきたと。夜、神様が現れて。夢だという話もありますし、神様だという話もあります。で、そこに定住するようになったと。

そして、佐敷の場天原（ばてんばる）という所があります。場天といったらですね、この一帯を場天といってます今は。津波古（つはこ）。

場天原というのはこっちにあるんです。字新里と字佐敷の中間位です。兼久（かねく）の上の方。このあたりです。このあたりに、屋敷を構えて、魚捕りをして、魚を売り歩いておったそうです。これはまだ、鮫川が、若い頃です。独身時代ですね。で、佐敷だけじゃなくして山を越えて大里、大里あたりまで魚売りをして行ったら——大里には大里城（おおざとぐすく）とか、大城城（うぶぐしくぐしく）、大城城（おおしろぐすく）ですね、があるそうですが——、そこを、近くでも魚売りをしておいたら、その娘が、この魚捕りを見て、

「あれは私の、婿になる。婿にしたい」と、「婿になるのはあの人だ」と言ったんで、城主は大変びっくりしたそうですが、一応娘が、そう言うので、呼び止められて、城に入れられて、

「うちの娘を、嫁にしてくれ」って。びっくりしてですね、

「私は、一介の魚捕りの身分であって、とてもその、領主の娘をもらうようなあれではない」と、言ったが、

「いや娘がぜひにと言っておるから」ということで一緒になったと。それが、大城（おおしろ）、大城城（うぶぐしくぐしく）ですね、城主です。ね。

で、もらって、佐敷の場天原。まあこの一帯になるんでしょうか、場天原に、暮らしておったそうですが。その時にまあ、子どもができたわけですね。そこで暮らして、男の子と女の子ができた。男の子が、苗代大親（ナーシルウフヤー）という。

〔事例1〕は、鮫川大主の生涯を語る話となっている。鮫川大主は飢饉による米騒動によって伊平屋島を脱出し、国頭村の宜名真から沖繩本島の東の海岸に回って三方が山のように囲まれた佐敷に着いた。鮫川は

佐敷の場天原という所に屋敷を構えて魚を捕って売り歩いていたころ、大城城主の娘に見初められて結婚して子どもが生まれたという。佐敷では通常、〔事例1〕のような語りがなされる。一方、鮫川が生まれた地とされる伊平屋島で調査すると、〔事例1〕とほぼ同内容の話を聞くこともできるが、鮫川大主という名前は聞いたことはあるがよく知らないと言られる場合が多い。鮫川大主の父の屋敷大主に関しては、墓のある伊平屋島では詳しく語られるが佐敷では詳しく語られない。

鮫川大主は伊平屋島から佐敷に渡ってきた後、次第に勢力を伸ばしていったようである。佐敷には現在でも鮫川大主にまつわる史跡群があるが、元の位置より移動している。

〔事例2〕「鮫川大主の史跡群」

元はね、地滑り前は、この森から、直距離にしてね百メートルぐらいの所にありましたよ。場天原（ばてんばる）。今はもうサトウキビ畑になっています。もう、影も跡形もないですからね。昔は木がうっそうとして、坂道でね、簡単には登れない年寄り。人間が、通れるぐらいの、道しかなかつたんです。その代わり、全部、石を、並べて、造られてましたねえ。石畳。昔から、場天。これはね、どうして場天になったかという、地名の、年寄りの話ですよ。天に最も近い、所と、いう意味で付けたという人がおるわけです。そういう説もあります。その、場天原の一番奥の方にね、佐銘川（鮫川）大主の、御殿（うどうん）があったんです。御殿というのは、茅（かや）葺きの家が、最初は。で、茅葺きから板葺きになって、それから島瓦赤瓦、なったんですがね。でこれを、みんな字民（あざみん）が、共同作業で造ってあげたと。で私たちが、小学校時代は、イシグワヤー、柱みんな石、石柱、だったんですがね。あの跡

があつたんです。でそこはもうなくなつたもんだから、今度は今んところに移つた。七十四番地、沢川原（たぐがわばる）の七十四番地に移つたんです。これは大正二年。七十四番地、だつたと思うんですがね。珍しいことに、この沢川原は、一番、拝所が多い所、新里で。新里でも、拝所の多い所は沖縄でも、これ、珍しいぐらい。一番拝所が多い所はこの沢川原です。

シャートロット台風で（崩れた）。イビの森（むい）というのは、イビというのは拝所のこと。拝所と書いてイビと読むんです。拝所の森というのは、鎮守の森です。新里の。これ佐銘川（鮫川）とは関係なしに、新里の元々からの、拝みどころ。これが、イビの森（むい）というんですがね。ところが、昭和三十四年のシャートロット台風で、山崩れがあつたもんだから、佐銘川御殿（うどうん）の、魂は——御殿（うどうん）もそうですが、佐銘川が使つた井戸、ウカーですね。そのほか拝所が、四ヶ所、ありましてね。佐銘川御殿の中に——それはこつちに移してあるんです。伊平屋神とかね。それは元々は、向こうにあつたんです。佐銘川御殿の、元の、敷地内に。これ（位牌）はね、大正二年以前からあつたと。これ位牌ですよ、佐銘川大主の位牌は。真っ赤なね、漆。上等な漆を使って全然今でも、変質、変色しない。立派な漆で、やられてますねえ。⁸⁾

〔事例2〕は、鮫川大主にまつわる史跡群についての語りである。大正十年生まれの〔事例2〕の話者が幼少時より実際に見た情景についての描写を含んでいるため、史跡群が消滅した今となっては貴重な語りとなっている。佐敷町字新里場天原には屋敷跡や墓など鮫川大主にまつわる史跡群があつたが、昭和三十四年（一九五九）十月十五日のシャート

ット台風に伴う豪雨による山崩れでそれらの大部分が崩落してしまつたという。したがって、それらの史跡群は移転させられたり消滅したままになつてゐる。鮫川大主の位牌をまつる佐銘川御殿は、場天原にあつた鮫川大主の屋敷跡から大正二年（一九一三）に現在地の字新里沢川原四十七番地（事例2）の七十四番地は語り違い）に移転され、佐銘川御殿または神アシャギとも呼ばれている。昭和六十年（一九八五）三月に佐敷町の有形民俗文化財に指定された佐銘川御殿には、鮫川大主と妻（真鶴金）をまつつた赤い位牌と、鮫川大主の霊を守つたといわれる七柱の神人の御香炉がまつられている⁹⁾。しかし、平成十五年（二〇〇三）三月に筆者が再調査した時には、木造瓦葺きの佐銘川御殿は倒壊して、敷地の端にプレハブの仮屋が建てられており、その中に赤い位牌と七つの御香炉がまつられていた。古老に聞くと、倒れる危険があつたのでプレハブを建てて仮に位牌を納めていたが、去年の台風で倒壊した。経済上の問題で、佐銘川御殿の再建は難しいとのことであつた。

元は場天原にあつた佐銘川御殿が大正二年（一九一三）に現在地の沢川原四十七番地に移された理由は不明である。この問題について、『佐敷村文化財要覧 昭和五十年版』は「場天嶽にあつた殿を、位牌を守るために新里に移し、佐銘川殿としたか、これとは別に佐銘川殿を特別に建てて位牌を祭つたのか。何か不可解なところがある¹⁰⁾」と記し、『佐敷町文化財Ⅲ 佐敷町の文化財』は「第一尚氏の滅亡に伴い、殿を守る「あと守り」がいたといわれるが、何んらかの事情で7代で中断したため場天御嶽に在つた殿の位牌を守るために、現在地に移したものと思われる¹¹⁾」と記している。『佐敷町文化財Ⅲ』の説によると、佐銘川御殿にまつられている七つの御香炉は殿を守つた「あと守り」の神人たちのも

ので、何らかの事情で「あと守り」が絶えたため、殿の位牌を守るために大正二年に場天御嶽から現在地に移されたということになる。事實は不詳であるが、興味深い説といえる。

〔事例2〕の話者によると、昭和三十四年の地滑り前まで場天原の一番奥の方にあつた鮫川大主の屋敷跡は、昔は木がうつそうとしており、そこに行くには急峻な細い石畳の坂道を登らなければならなかったという。場天原の鮫川大主の屋敷跡周辺には、場天殿跡、上場天嶽、上場天井、下場天嶽、下場天井、ヤマトウバンタ、ウティンジク（御天竺）、アンプシモー（網干毛）、鮫川大主の墓、場天ノ口の墓などの史跡群があつたが、昭和三十四年の山崩れですべて消滅してしまつたということであつた。これらが現在のどこになるのかという点については、『佐敷町史2民俗』の「民俗地図」に詳しい位置が示されているので参照されたい。¹² 鮫川大主の屋敷跡については、『琉球国由来記』（二七二三年成立）卷十三の佐敷間切の「バテン巫崇所」の四ヶ所の中に上バテンノ嶽と下バテンノ嶽の名がみえ、そこに「上バテンノ嶽 神名 サメガア大ヌシタケツカサノ御イベ——昔佐敷按司御屋敷タル由也——／新里村／下バテンノ嶽 神名 コバツカサノ御イベ／同村¹³」と記されている。このことから、元は場天原にあつた上場天嶽が鮫川大主の屋敷跡であつたらしいことがわかる。鮫川大主の屋敷跡周辺の様子については、大正末から昭和初めにかけて沖繩各地を調査した結果をまとめた鎌倉芳太郎氏『沖繩文化の遺宝』の中に「佐銘川大主は実在した人物と思われ、馬天の丘陵「佐銘川ギタハンタ」には、横穴式洞窟の入口に石を積んで造られた墓がある。また近くにはその住居跡と伝えられる「上馬天の嶽」があり、此所は与那原湾内馬天浜に注ぐ馬天川の流れる馬天原にある。そして

「上馬天の嶽」の後方に「馬天御井」があり、その前方に「馬天殿」、更にその前方に「城火の神」、続いて「下馬天の嶽」があり¹⁴と記されている。また、「鎌倉芳太郎ノート」には、「サメ川大主墓」「バテンオカ―平面図」などのスケッチが残されている。「サメ川大主墓」には、「サメ川ギタハンタ」と称されていた急峻な崖に鮫川大主の墓や場天ノ口の墓があつた様子が描かれており、「サメ川墓北二向ク」「ノ口墓厨子見ユ」とメモが記されている。「バテンオカー平面図」¹⁵には、井戸周辺のスケッチの横に「下バテン御嶽ハ傾斜地ナルモサメカワノ屋敷趾ト称セラレ近年ニ至ルマデハ雑木林ナリキト云フ」とメモが添えられている。鎌倉芳太郎氏の調査資料には、大正末から昭和初めにかけての鮫川大主関係史跡群の様子が詳しく描いてあり、極めて貴重である。

昭和三十四年の地滑りで消滅した鮫川大主関係史跡群のうち、アンプシモー（網干毛）についての伝承事例を提示する。

〔事例3〕「鮫川大主と網干毛」

鮫川大主（さめかわうふしゅう）は、伊平屋から、こちらに、移つて参りましてね。真つ先に、魚を捕つて、それで生計を立てていたと。海に出て、魚を捕つてきて、自分の家じゃなくて、自分の家の近くに、御殿（うどうん）の近くに、奇麗な松の木があつたんです。これは、私たちもよく分かります。その、傘を広げた松の上に、漁網を干した所。その、森が、アンプシモー（網干毛）と、名前が付いたんです。網干し、網を干す、森、ということだね。アソビナー、遊ぶ庭、のことを、モー（毛）といいます。また原野にもモーと言います。¹⁷

〔事例3〕は鮫川大主が漁網を干した所に関する語りである。伊平屋島から佐敷に渡つてきた鮫川大主は魚を捕つて生計を立てていたが、漁

を終えた時、自分の家の近くで漁網を干したという。その、漁網を干した丘がアンブシモー（網干毛）と称されており、地滑りで消滅する前までそこには奇麗な松の木があったということである。（事例1）でも語られていたように、鮫川大主は佐敷に来た時には魚を捕って生計を立てていたと伝承されており、その伝承を反映した史跡がアンブシモー（網干毛）ということになる。地滑りで消滅した後、アンブシモー（網干毛）跡地はサトウキビ畑になっており、かつての面影はない。

〈事例4〉「イビの森」

鮫川大主の、屋敷というのが、場天原にありました。今の兼久（かねく）の上の方ですね。そこにあつたんですが、台風の際に。鮫川大主の屋敷跡はちゃんと残ってました。ちよつとした石垣が積まれて。場天御嶽（ばてんうたき）とか上場天御井戸（イイバテンガー）、下場天御井戸（シタバテンガー）、ヤマトバンタとか色々残ってましたが。それが全部、地滑りで、無くなってですね。結局、イビの森（ムイ）に移そうじゃないかということ、向こうに、場天御嶽、上場天御井戸、下場天御井戸、ヤマトバンタというのを向こうに移したわけ¹⁸です。

〈事例4〉は昭和三十四年の地滑りで消滅した鮫川大主関係史跡群の一部をイビの森（ムイ）に移したという語りである。イビの森は佐銘川御殿のすぐ横の佐敷町字新里沢川原四十五番地にある。（事例2）に語られているように、イビ（いべ・威部、御嶽の神の在所）のムイ（森）とは拝所の森という意味だそうで、新里の元々からの氏神をまつた拝所であつたという。地滑りの一年後、消滅した鮫川大主関係史跡群のうち、場天御嶽（鮫川大主の住居跡）、上場天御井戸、下場天御井戸（鮫川大主の住居跡にあつた井戸）、伊平屋神（ヤマトバンタ）、ウティンジ

ク（御天竺）を移したということである。したがって、現在のイビの森には、元々の「イビの御嶽」に加えてこれら鮫川大主関係史跡群がまつられている。

〈事例5〉「伊平屋神」

この伊平屋神というのはですね、一般的にはヤマトバンタといつてますが。これについての伝承はですね、いわゆる、自分たちの祖先のこし方を、拝むと。ヤマトバンタという名前が付いとるからおそらく、この鮫川・尚巴志の系統というのは、九州あたりから渡つて来たんじゃないかと、ゆうような、話もあるわけですよ。ただ、地元新里では、伊平屋神（いへやがみ）。イヒヤ、イヒヤと言つてますよイヒヤ。伊平屋神といつて。ま、伊平屋を拝むにしても日本を拝むにしても大体方向は同じなんです、北の方ということ¹⁹。

〈事例5〉はイビの森に移された鮫川大主関係史跡群のうちのひとつである伊平屋神についての語りである。『佐敷町文化財Ⅳ』の「イビの森」の項には「伊平屋神（佐銘川大主の生地である伊平屋島への御通し所で、ヤマトバンタともいう²⁰）」と記されている。崩れる前は崖（バンタ）をなした拝所であつたという。先に「鎌倉芳太郎ノート」の「サメ川大主墓」のメモに「サメ川墓北二向ク」と記されていたことを述べたが、場天原にあつた鮫川大主の墓のちょうど北側に伊平屋神（ヤマトバンタ）があり、さらにその先に伊平屋島がある。なお、「伊平屋神」は、場天原にあつた鮫川大主の屋敷跡とされる「上場天嶽」からは北西方向に位置する。かつて新里では旧暦八月十日にヤマトバンタに登つて伊平屋を拝む行事「伊平屋島拝み」が行われていたが、現在では行われていない²¹。（事例5）の鮫川・尚巴志の系統が「九州あたりから渡つて来たんじゃない

なからうかと、ゆうような、話もある」という部分は、折口信夫氏の説を指していると推定される。昭和十二年（一九三七）に折口信夫氏は「琉球国王の出自―佐敷尚氏・伊平屋尚氏の関係の推測―」²⁴という論文を発表し、九州肥後国葦北の「佐敷」を出た名和の支流が正平・応永の間に渡琉して佐敷に住み着いたという説を主張した。この説は実証的な説ではないため賛同を得られていないようであるが、著名な学者の説であるため、土地の伝承にいくぶん影響を与えているように思われる。

ヤマトバンタについては、『琉球国由来記』卷十三の南風原間切与那原村の「友盛ノ嶽御イベ」の項に「バテン大和バンタ」の名がみえる。その部分の記述によると、往古、聞得大君が渡海中逆風にあい「日本之地」に漂着したが、バテンノロが無事バテン瀧原に連れ帰ったという。その項の末尾「タジヨク魚ノ寄事」に「バテン大和ハンタニ在ス―聞得大君御参着之時、坂迎仕タル故、大和ハンタト云ヨシナリ―サメガト云イベニ祭り、バテンノロニ遣ス由也。サメガト云ハ人ノ名也。此人、バテン巫父親ノ由、云伝也」²⁵という記述がある。この部分から、「大和バンタ」という呼称はバテンノロが聞得大君を日本（大和）から連れ帰った故事に由来するらしいこと、サメガというイベ（拝所）に祭られている人物「サメガ」はバテンノロの父親と伝えられていることなどがわかる。『遺老説伝』所収の同話には、「場天祝女、出船の時、沙明川に許願して往く。沙美川は、乃ち是れ場天祝女の父なり」という注や、場天祝女が聞得大君を「場天浜」に連れ帰ったこと、帰った聞得大君を「沙明嘉、海辺に出で、恭しく酒盃を献じ、以て喜迎の礼を為す」などさらに詳しく記されている。²⁴この『遺老説伝』所収話から、場天ノロが日本から聞得大君を場天浜に連れ帰ったこの出来事は鮫川大主生存時のことで

あったらしいことがわかる（『遺老説伝』には「ヤマトバンタ」の語は記されていない）。折口氏は『琉球国由来記』卷十三の「友盛ノ嶽御イベ」の聞得大君日本漂着の部分を用いし、「歴史はどうであつても、大和ばんだと言ふ地名は、大和人に縁のある崖だつたに違ひない」と述べ、ヤマトバンタを足掛かりとして九州肥後国葦北の「佐敷」説を展開している。『琉球国由来記』卷十三の記述に加え、地元新里ではヤマトバンタを「伊平屋神」といいかつては旧暦八月十日にヤマトバンタに登つて伊平屋を拝む行事「伊平屋島拝み」が行われていたことなどから考えると、伊平屋神（ヤマトバンタ）は古くから鮫川の出身地伊平屋を拝む場所であつたとみてよいように思われる（『琉球国由来記』の聞得大君日本漂着の事件が本当にあつたかどうかは不詳であるが、もしこれが事実であつたならば、ヤマトバンタという別称はその事件後についたことになる）。

〈事例6〉「御天竺」

御天竺（ウティンジク）。御天竺というのは、インドのことをいいます。インドを、天竺というんですよね。仏教の発祥は、インドだと。そういう意味で、こちらにも、仏さんを拝むからには、まずインドの方に向けて、手を合わしましょうと、いうことで、造られたと、御天竺を設けたという、あれがあるんですがね、伝承。これはもう、大昔から。時期は分かりませんがね。御天竺というのは、とにかくインド、のことを、いいますから。仏教が入ってからのことでしょうねえ。だからそれからすると、鮫川も、仏教を拝んでいたかも、しりませんねえ。（沖繩は）祖先崇拜。だから沖繩は祖先崇拜は、ありますけどねえ。仏教というのはないのに何でこれがあるかなあと。それを考えてみて御天竺があると

いうの、ちょっと妙だなあと思うんですがね、それか鮫川も、仏教を拜んでいたんじゃないかなあと考えられますよ。本土に行ったり来たりしてますから、あの方は。たぶん、その影響で、本土の仏教というのを、理解していたんじゃないかなあと思うんですよ。⁽²⁶⁾

〔事例6〕は地滑りで消滅してイビの森に移された鮫川大主関係史跡群のうちの一つである御天竺についての語りである。『佐敷町文化財Ⅳ』の「イビの森」の項には「御天竺（天の神への御通し、現物は御天坐神となつているが誤りだといふ）」と記されている。現在イビの森に設置されているコンクリートの柱には「御天坐神」と刻んであるが、土地では「ウティンジクガミ」と称しているようなので、新たに標柱を設置した時に「御天竺神」の「竺」を「坐」と誤記してしまったようである。琉球においては、英祖王代の咸淳年間（一二六五～一二七四）に禅鑑という補陀落僧が漂来して浦添城の西に極楽寺を建立しており、鮫川大主の時代の琉球ではすでに仏教の存在は知られていた。〔事例6〕では日本本土に行ったり来たりした鮫川は、本土の仏教の影響を受けた可能性があるのでと語られているが、鮫川大主関係史跡群の中に「御天竺神」という仏教の影響をにわたせる史跡があるのは興味深い。

〔事例7〕「鮫川の墓の移転」

鮫川の骨は（佐敷）ようどれに移しました。五九年の台風です。崖が、五十センチか一メートルかしらんがこう、崩れ落ちたんで、墓の入口がぼっかり開いたわけですよ。このままじゃこれも危ないということ、中に、ニイギノフニつていって、何ですかねえ。焼き物ではない、堅い土ですね。岩石に近いような。そのの、お棺があつたんです。この棺、これ、鮫川大主夫妻の。これをようどれに移しました。棺がありました。

（骨は）もうほとんどこなごなになってます。粉みたいになってます。一応残ってました。⁽²⁸⁾

〔事例7〕は昭和三十四年（一九五九）の地滑りで鮫川の墓の入口が開いたため、鮫川大主夫妻の骨を「佐敷ようどれ」に移したという語りである。骨を移す時に実際に立ち会った話者の語りであるため、当時の生々しい状況がうかがえる。「佐敷ようどれ」は第一尚氏一族の墓である。全体が石造りで、屋根は半円形、間口三メートル、奥行二・六メートル、高さ二メートルで、駕籠型をした独特の形をしている。元は字佐敷西上原の崖下にあつたが、崖崩れのため乾隆二十九年（一七六四）に字佐敷仲上原一六三六番地の現在地に移葬された。最初は尚思紹夫婦、尚思紹の舅姑美里之子夫婦、尚思紹の次男美里大比屋夫婦、尚思紹の娘佐敷大のろくもいの七人が合祀してあつたが、一九五九年の地滑りで鮫川大主夫妻も合祀して計九人の霊をまつてある。⁽²⁹⁾

II 尚思紹関連史跡と伝承

先にみた『中山世譜』巻四「尚思紹王」の項には、尚思紹の父は伊平屋島の鮫川大主で、鮫川は佐敷間切新里村場天の地に渡つてきて大城按司の女と結婚して一男（尚思紹）一女（場天ノ口）が生まれたことが記されていた。さらにその続きには「思紹長成。移居于苗代村」。当時之人。称「苗代大親」。／苗代大親。通于佐敷村。美里子之女。而生佐敷小按司。／小按司即巴志也。又曰「美里大親」。平田大親。其兄弟也。」「附記／思紹為人。資質純厚。百姓推戴。為「佐敷按司」。」「紀／明、永樂四年丙戌、即位」と記されている。この記述から、思紹は成長して苗

代村に移り住んで苗代大親と呼ばれ、佐敷村の美里子之の女との間に子（佐敷小按司）をもうけたこと、巴志・美里大親・平田大親は兄弟であること、思紹は資質純厚であったので百姓が推戴して佐敷按司となったこと、明の永楽四年に即位したことがわかる。

〔事例 8〕「苗代大親」

（鮫川の）子どもが苗代大親といつてですね、これは、宇佐敷の、苗代原（なえしるばる）——現在、役場から、ちよつと東側になります。——苗代原といふのがあつた——そこに住んで、豪農になつて、勢力を蓄えたんで、苗代大親と、いわれるようになったといわれてますけど。そこに住んどつたらいいんですが。その苗代大親が、若い頃ですね、ある女と、まあ遊びながらの子どもといふことでしょうか、結婚まではしないが子どもができた。そしたら、これは、不義の子だといふことで、女は、大変悲しんで。まあ、親父にすると、尚思紹の妻の關係ですがね、認めないという態度だつたんでしようね。それで、女は逃げてですね、アマチジョーガマ（天統城洞穴）——天に続く城の洞穴の洞ですね、ガマ——アマチジョーガマといふ所に逃げたと。そこで、一日二日隠れておつたが、もうこれは認められてないからといふことで、子どもを置き去りにして、逃げたわけですよ。しかし、二三日経つて、気が落ち着かなくなつたんでしようねえ、やつぱり気がとがめて、様子を見にといつて行つたら、このほら穴の入口に、大きな犬が、構えておると。それでも、自分の子どもを確かめる必要があるといふことで、勇気を出して行つたら、犬も危害を加えなかつたそうですよ。中の方に行つたら大きな鳥が——この鳥も、何の鳥かということがはつきりしてないんですが——、赤子を——鳥は、体温高いですよ——羽で、囲うようにして

暖めておつたと。そして犬がおっぱいを飲ませて、育てておつたと。いふことで、女は、勇気を出して、赤子を抱いてですね、そして家に連れ帰つたといふことなんです。その住んでおつた所が、場天原なんですね。そしてその頃はもう、いわゆる親父といわれる苗代大親、後の尚思紹王ですね。苗代大親は、もうかなりの勢力を持つてゐる。ウエグスク（上城）、佐敷ウエグスク、つきしるの宮のある所。そこでもう、勢力を持つてそこに暮らしておるわけですよ。で、少年時代、ずっと、かなりやんちゃなあれだつたらいいんですが。

〔事例 8〕は苗代大親（尚思紹）が子をもうけた時の話である。苗代大親が若い頃、ある女との間に不義の子を生んだ。親が認めなかつたので女はアマチジョーガマといふ所に逃げて一日二日隠れていたが、子どもを置き去りにした。しかし、二三日後、気がとがめて様子を見に行く、このほら穴の入口に大きな犬が構えていた。勇気を出して中の方にいくと、大きな鳥が赤子を羽で囲うようにして暖めており、犬が乳を飲ませて育てていた。女は勇気を出して赤子を抱いて場天原の家に連れ帰つた。そしてその頃、苗代大親はかなりの勢力を持つて佐敷ウエグスク（上城）で暮らしていたといふ。

佐敷で調査すると苗代大親（尚思紹）に関する逸話はほとんど聞くことができない。〔事例 8〕のように、子の尚巴志が生まれた時の話を聞くことができる程度である。〔事例 8〕では苗代大親の相手の名前が語られていないが、佐敷では通常、美里子之の娘とされる。先にみた『中山世譜』巻四「尚思紹王」の項に「美里子之女」とあつたが、『佐銘川大ぬし由来記』³³も同様の記述となつてゐる。また、娘が子を一時捨て置いた場所は、〔事例 8〕ではアマチジョーガマ（天統城洞穴）と語られ

ているが、佐敷では通常、「つきしろの岩」に捨てられたと語られる（玉城村下親慶原のアマチジョーガマ説もある）。「つきしろの岩」と「つきしろの井（カー）」は字佐敷島宜原にあり、赤子の尚巴志はこの岩の所に捨て置かれ、この井戸の水で産湯を使ったとされる。

苗代大親（尚思紹）の関連史跡としては、字佐敷島宜原に「苗代大親の屋敷跡」がある。戦前は白木造り平屋の赤瓦葺きであったというが、第二次大戦で焼失したという。現在はコンクリートで建てられており、尚思紹王の位牌がまつられている。「苗代大親の屋敷跡」の南に「苗代殿」がある。また、字佐敷島宜原に「美里殿（ンザトドゥン）」と「美里井（ンザトガー）」がある。これは尚思紹の舅である美里之子の住居跡と井戸だといわれている。美里殿も現在はコンクリートで建てられている。字佐敷島之上原にある「佐敷上グスク（上グスク）」は、尚思紹・尚巴志父子の居城跡とされている。佐敷上グスクの敷地内にある「つきしろの宮」は、第一尚氏歴代の王をまつるため、昭和十三年（一九三八）に第一尚氏の氏子によって建立されたものである。

『中山世譜』巻四「尚思紹王」の項には「世子、尚巴志。其余不_レ伝」とあり、尚巴志以外の子については記されていないが、佐敷の伝承では、長男尚巴志、次男美里大比屋、三男平田大比屋、四男与那原大比屋、五男（庶子）手登根大比屋、長女佐敷祝女とされている。³⁴ただし、尚思紹の子の名については伝承にゆれがあり、話者により異なる場合がある。「平田大比屋」の墓は字手登根赤地原にあり、そのすぐ近くに、「おもろさうし」にも名がみえる「手登根大比屋」の墓がある。また、「佐敷ノ口殿内」は字佐敷島之上原にあり、現在はコンクリートで建てられている。初代佐敷ノ口は尚思紹の長女であったとされ、喜友名家の系統の女

性が昭和初期まで継承していたというが、現在は後継者が絶えている。

III 尚巴志関連史跡と伝承

次に尚思紹の子であった尚巴志の関連史跡と伝承について検討する。としたい。『中山世譜』巻四「尚巴志王」の項には「神号、勢治高真物（童名不_レ伝）／明、洪武五年壬子、降誕。／父、尚□_マ紹王／母、不_レ伝。／妃（名号不_レ伝）／王有_二数男_一。／第二子曰_二尚忠_一。／次曰_二金福_一。／次曰_二布里_一。／次曰_二泰久_一。／其余不_レ伝。」「附紀／巴志。生得身体極小。長不滿_二五尺_一。故俗。皆呼_二佐敷小按司_一。」「紀／明、永樂二十年壬寅、即位。³⁵」と記されている。この記述から、明の洪武五年（一三七二）に生まれたこと、父が尚（思）紹であること、尚忠・金福・布里・泰久などが数人いたこと、背が低かったので佐敷小按司と呼ばれたこと、明の永樂二十年（一四二二）に即位したことなどがわかる。三山を統一した尚巴志に関しては数々の逸話があり、史料も多く残されているわけであるが、佐敷で最もよく語られる話を次に提示する。

〈事例9〉「尚巴志王の出世（藁しべ長者・金の屏風）」

子どもが十二、三歳の頃、母親が重体になってですね、

「実はお前の、お父さんは、ウエグスクにおる、苗代大親という人だ」と。「そういう由緒ある方だから、一人前になったら、親父を訪ねなさい」と、いうことで、亡くなったらしいんですが。亡くなる前に、「お前に、やる、何もない」と。何かあの、藁しべか、藁束を、一束渡して「これしかないからこれを、形見としてあげる」と——あの、これ全国に藁しべ長者という、それに類するような話だということなんです。

藁を持って、やはり少し町に出てみようということで、歩いて、那覇の入口に行くと、味噌売りの女と会ったらすね、味噌売りの女がその藁を欲しがった。だけれど、

「これは、親の形見だから、譲るわけにはいかない」と、言ったら、

「それじゃ、味噌と交換しましょう」と、いうことで、味噌と換えるんですね。その味噌を持って歩いてると今度は、野外で、鍛冶屋さんみたいな、これを持って、こぎながら、火をおこして、鍛冶屋さん。露天の鍛冶屋さんですか、ちよっとした鍋釜の修理をしたり、色んなそういうものを、つかったら。鍋の修理をする時には、鉄片を、穴開いた所に鉄片を、裏表から付けて、ボルトみたいなもので締めるんですが、その時に、いわゆるパッキングの代わりですか、味噌を、我々の子どもどもの時まではよく、ちよこちよこ見ることがありました。何かあるとその味噌をつけるという、いうんでその味噌を欲しがったわけですよ。で、

「その味噌を、何とかならんか」と言ったらですね、

「これは、親の形見だからだめだ」と言ったら、

「それじゃ」ということで、鉄くず。まあ鉄くずか鉄か、鉄の塊か、みたいな、鉄塊ですかね、鉄の塊。これと交換しようというのでそれを持って、行くと、刀鍛冶が、盛んにこの、やっておるそうです。鉄を打って、鍛えて、刀を作るあれをやっているところを見て、

「そうだこれで、刀を作らんといかん」と、いうことで、関心があつて非常に見ておつたら、鉄塊を持っておるのを見て、

「これと何か交換しようじゃないか」と言ったら、

「いや、これは、そういうようにやるものじゃない」と。味噌が鉄塊になつてその鉄塊で、刀を作ると。作ろうということ、刀鍛冶に頼んだ

らですね、

「手伝いをしたら、刀作ってやる」と、言った。その、手伝いをしとつたらいいんですが、四、五日経つても一週間経つても作る気配がないので、

「おかしいじゃないか。早く作ってくれんと困る」ちつたら、やっと、刀を作つて、手に入れたらしいんですよ。鉄塊は向こうが取つたわけですね、鉄の塊は。そして、それからその刀を持って、ぶらりぶらりと那覇を過ぎて、那覇と浦添の近くに小湾（こわん）という所があります。——これ浦添線になります。小湾——。そこに行つて、舟を借りて、沖に出て沖を回つてみたいということで、やつておつたら、いつの間にかうとうとしてですね、刀をこう持ったまま、寝てしまったんですね。ところが、フカ（鱈）が来て、近くに寄つたフカが、人間が乗つておるということで、なかなか、飛び上がったりするけれども、よう、これに襲いかかれない。飛び上がつては下り飛び上がつては下りしておるのを沖の方で、ちょうど日本の方から、ヤマトの方から来た、船が、これを見てですね、

「危ない」と、いうことで、この船を、小舟の所に近づけて来たらすね、中に少年が、寝とるわけですね。で、少年を起こして、「どうしたんだ」つたら、

「いやこうこうこうこうで自分は」。今までのいきさつなんか話したりしたらですね、

「刀をちよつと、見せてくれ」ちつたら「これはすばらしい刀だ」と、ゆうことで「この刀、欲しい」と。

「これは、譲るわけにいかん」と。で、しまいには向こうは、船から、

金の屏風を出して、

「これと交換しようじゃないか」と、言ったんで、

「それなら良からう」ということで金の屏風をもらって、また舟は、港につけて、金の屏風を担いで、佐敷に向かったわけですね。今度こそ、親父に会うんだということで、金の屏風を、親父に差し出して、

「実はこうこうだ」と、親子の名乗りをして、それで、認められて、子どもとしての扱いを受けるわけですね。そして、青年時代になって、佐敷小按司（さしきこあんじ）という——小さな按司と書くんですが——、佐敷小按司というようになったんですわ。一三〇〇年の末か一四〇〇年の初め頃に、佐敷小按司は、大里城を攻めるんですよ。で、その大里城を攻めるということは、尚巴志にとっては——その、親子対面した、少年ですね。これが佐敷小按司になったわけですが——、いわば自分のおじいさん、まあおばあさんになるかな、おばあさんというのが大里城（うぶくしくぐしく）、の娘なんですよね。大里城は、大里按司に滅ぼされるんですよ。ですから、大里城を攻めるということは、考え方によっては、おじいさんのあだを討つんだということにもなるわけですね。で、大里城主を滅ぼして、苗代大親は、息子の尚巴志を、大里城主にしたわけですね。佐敷小按司を大里城主にしたわけですね。その後で、一四〇五年になって、佐敷小按司は、父の命を受けて、中山を倒します。まあ歴史的には色々問題あるんですが中山は当時は浦添だったといわれています。で、あの、中山を滅ぼして、一応、中山王と。三山分立の時代なんですよね。中山・北山・南山の中山を滅ぼしたわけですね、まず。そして、それから、十年経って、十三年ですか、一四一九年に、北山を討ちます。今のあの世界遺産になった今帰仁城（なきじんぐすく）ですね。

北山王。これも十九年説、二十二年説色々あります。で、それから十年経ってまあ十九年として、それから十年経って一四二九年に、南山を攻めるわけですよ。その南山を攻める時に、おもしろい金の屏風の話が出てくるわけです。

南山は難攻不落で、なかなか攻められなかったんですが、南山を攻める前にですね、南山王はかねてから、佐敷小按司が、金の屏風を持つとるそうだと。金の屏風を欲しくしようがないと。尚巴志というのは、戦略家であつたと後世いわれておるんですが。その時に、南山王が、「金の屏風を、何かと交換してくれんか」と、いう申し入れをしたそうです。したら尚巴志は、

「南山城の下のカデシガー（嘉手志川）を、金の屏風と交換しようじゃないか」と、いう申し入れをしたら、やっぱりあの、南山の上の連中、役人なんか、南山王に、

「水は大事だから、水はやらん方がいいよ」言うたら、

「そのの井戸をやったって、それが、持って行かれるもんでもないし、いいじゃないか」と、いうことで、金の屏風と交換したら、尚巴志は、そこに、柵（さく）を作ってますね、水を使わさないと。へたら、すぐ近くに集落がありますね、その、集落の人々は水が使えなくて困ったわけですよ。

「何とか水を使わせてくれ」ちったら、

「今後、俺に味方をするなら、水をやる」ちったら、次から次へと、水を欲しい人が出てきて、結局、城下の民は、南山王の心を離れたわけですね。尚巴志の、言うことを聞くようになったわけですよ。その、いわゆる、住民の不安が高まった頃をねらって、兵を挙げたと。それが一四

二九年と、いうことで、城下の民はほとんど他魯毎（たるまい）に協力しないと、南山王の他魯毎には協力しない尚巴志に協力したと、いうことで、他魯毎は滅亡するわけです。で、南山を滅ぼして、これで、中山・北山・南山を倒して、三山統一をしたと。

である、北山を倒した後か倒す前かに、すでに首里に行っているわけです。中山王ということですね。中山王武寧を滅ぼして、首里に行っているわけです。で、三山を統一をしたと。中山・南山・北山を統一したというところで三山統一、をしたということ、まあ沖繩の戦国時代に終止符をうったのが尚巴志であると、いうのが、地元の誇りなんですね。³⁶

〔事例9〕は尚巴志王の出世を語る話である。前半には藁しべ長者のモチーフが取り込まれており、後半には金の屏風を利用して南山を倒す話が語られている。これらの話は尚巴志王の逸話の中では最もよく知られているもので、佐敷のみならず沖繩諸島の各地でもよく聞くことができるものである。

佐敷小按司（尚巴志）の関連史跡としては、苗代大親（尚思紹）の所でみた、尚巴志が生誕後捨て置かれた場所という「つきしろの岩」や尚巴志の産湯を使った所という「つきしろの井（カー）」、尚思紹・尚巴志父子の居城跡とされる「佐敷上グスク（上グスク）」などがよく知られている。

その他、字佐敷には、尚巴志が農耕した水田跡だというアダニヤマ跡がある。『佐敷町史2民俗』の「アダニヤマ」の項には「安谷（アダニ）山は、現在の佐敷町役場の前あたりに位置し、尚巴志が農耕をした水田があったと伝えられる。明治の終りごろまでは、間切（マジリ）サバクイ（役場吏員）が結婚すると、その日にここを拝む風習が続いていた。

この地には井戸もあり、尚巴志が使ったといわれる³⁷と記されており、『佐敷村文化財要覧 昭和五十年度版』には「戦前は周囲の田畑の中にデイゴとアダナが、こんもりと茂っていて、人目をひいていた³⁸」と記されている。現在はすぐ南にアスファルトの広い道路の国道331号が走っており、かつての面影は全くない。

尚思紹と尚巴志の関連史跡は、字佐敷に集中している。字佐敷島宜原の東側には「苗代大親の屋敷跡」・「苗代殿」や、尚巴志が生誕後捨て置かれた場所と井戸「つきしろの岩」・「つきしろの井（カー）」があり、字佐敷島宜原の西側には尚思紹の舅である美里之子の住居跡と井戸「美里殿」・「美里井」がある。島宜原のすぐ南の字佐敷島之上原には尚思紹・尚巴志父子の居城跡とされる「佐敷上グスク」があり、佐敷町役場の北方に尚巴志が農耕をした水田跡とされるアダニヤマ跡がある。これらが現在のどこになるのかという点については、『佐敷町史2民俗』の「民俗地図」に詳しい位置が示されているので参照されたい。³⁹

この他の佐敷小按司（尚巴志）の関連史跡としては、佐敷町字仲伊保の「ティーチバナ」がある。字仲伊保にはティーチバナと呼ばれる高さ五・六メートル、周囲約二十メートルの岩があり、この岩の下に多数の人骨が散在していたという。土地の伝説では、これらの人骨は知名之比屋が佐敷小按司に敗れた時のものだという。⁴⁰真偽は不詳であるが、このような伝説の存在からも、佐敷小按司（尚巴志）が次第に勢力を拡大していった様子的一端がうかがえ、興味深い。

〔事例9〕の後半部分の、尚巴志が金の屏風と交換して南山を倒した逸話で有名なカデシガー（嘉手志川）は糸満市にあるわけであるが、尚巴志をめぐる逸話と場所は、尚巴志が勢力を拡大してゆくにつれて広範

圃にわたってゆくことになる。やがて三山を倒した尚思紹・尚巴志父子は、首里城に住んで琉球全域を支配することになる。三山統一の際の逸話として、佐敷町字津波古には興味深い伝承がある。⁽⁴¹⁾

〔事例10〕「津波古の北山王子孫」

尚巴志が北山を討った時にですね、北山王の三男のホカマシー（外間子）というのと、四男のチャンクシー（喜屋武久子）というの——まあシーというのは、ある程度位が、ついておるんでこれ大人になってから小さいときに——、ホカマというのとチャンクというの二人を、人質みたいにして連れて来たんです。で、場天に連れて来て、尚巴志が、世の中落ちてきた頃に、これはもう早く殺してしまった方がいいじゃないかという話があったが、上層部の話し合いで、せっかく今まで生きてきたとるんだし、別に地域に害を及ぼすような恐れもないので、助けてやった方がいいじゃないかということで、そのまま、殺さずに、やったんですね。そしてその子孫が、字津波古（つはこ）のほぼ三分の一なんです。元々の津波古の人ですね。戦後は、よそからの町村からたくさん入って来たんですが。元々、戦前の津波古の人口のですね、約三分の一が、いわゆる北山系統なんです。尚巴志直轄の村で。そういう状況で、いまだに、北山の子孫というのはですね、その意識持ってますよ。⁽⁴²⁾

〔事例10〕は、字津波古に北山王の子孫たちが多数住んでいるという語りである。尚巴志が北山を討った時、北山王の三男の外間子と四男の喜屋武久子を入質にして場天に連れて来た。世の中が落ち着いてきた頃殺そうという話が出たが、上層部の話し合いで助けてやった。そしてその子孫が戦前の字津波古の人口の約三分の一をしめ、現在もその子孫が多く住んでいるという。字津波古には、外間子と喜屋武久子の住居跡と

される「外間殿」と「喜屋武久殿」がある。また、「外間子の墓」は津波古平良川原にあり、「喜屋武久子の墓」は上津波古原にある。北山王攀安知（一四一六年滅亡）の子とされる外間子と喜屋武久子の子孫が尚巴志直轄の地であった津波古に多数住んでおり、いまだに北山の子孫という自覚と誇りを持っているという点は、極めて興味深いものがある。

第一尚氏一族が合祀されている「佐敷ようどれ」には、現在、鮫川大主夫婦、尚思紹夫婦、尚思紹の舅姑美里之子夫婦、尚思紹の次男美里大比屋夫婦、尚思紹の娘佐敷大のろくもいの計九人の霊をまつてあることはすでに述べたが、尚巴志は「佐敷ようどれ」には合祀されていない。尚巴志は那覇市池端町の「天山陵」にまつられている。⁽⁴³⁾ 第二尚氏王統初代の尚円が第一尚氏王統を倒した際、第一尚氏王統歴代の陵墓天山陵が焼き打ちされることを察知して、尚徳王の近親者たちによって王たちの骨が持ち出されたという伝承があるということである。⁽⁴⁴⁾

結 語

以上で、佐敷町の人々の間で語り継がれてきた、第一尚氏関連史跡群とその伝承についての筆者なりの考察を終えることとする。

佐敷には正史には記されていない多数の第一尚氏関連伝説が伝承されており、第一尚氏に関連する史跡も多数存在している。佐敷の第一尚氏関連伝説は、伊平屋島から渡ってきたとされる鮫川大主にはじまる。鮫川大主は佐敷の場天原に居住し、次第に勢力を伸ばしていったようである。佐敷町字新里場天原の鮫川大主の屋敷跡周辺には、場天殿跡、上場天嶽、上場天井、下場天嶽、下場天井、伊平屋神（ヤマトウバンタ）、

御天竺（ウティンジク）、網干毛（アンブシモー）、鮫川大主の墓、場天ノ口の墓などの史跡群があった。しかし、昭和三十四年（一九五九）十月のシャーロット台風に伴う豪雨による山崩れでそれらの大部分が崩落してしまい、それらの史跡群は移転させられたり消滅したままになっている。本稿では、崩落前と崩落後の状況を詳しく探り、鮫川大主関連史跡群のかつての状況がうかがえるように努めた。

鮫川大主の子の苗代大親（尚思紹）の関連史跡としては、字佐敷島宜原に「苗代大親の屋敷跡」「苗代殿」「美里井」がある。また、『中山世譜』住居跡と井戸だとされる「美里殿」「美里井」がある。また、『中山世譜』には尚巴志以外の子については名前が記されていないが、佐敷の伝承では、長男尚巴志、次男美里大比屋、三男平田大比屋、四男与那原大比屋、五男（庶子）手登根大比屋、長女佐敷祝女とされ、それぞれに伝承がある。

尚思紹の子の佐敷小按司（尚巴志）の関連史跡としては、尚巴志が生誕後捨て置かれた場所という「つきしろの岩」や尚巴志の産湯を使った所という「つきしろの井（カー）」、尚巴志が農耕した水田跡だというアダニヤマ跡、尚思紹・尚巴志父子の居城跡とされる「佐敷上グスク（上グスク）」などが字佐敷にある。また、佐敷町字仲伊保の「ティーチバナ」という岩の下にあった多数の人骨は知名之比屋が佐敷小按司に敗れた時のものだという伝承がある。そして、字佐敷の「佐敷ようどれ」には、現在、鮫川大主夫婦、尚思紹夫婦、尚思紹の舅姑美里之子夫婦、尚思紹の次男美里大比屋夫婦、尚思紹の娘佐敷大のろくもいの計九人の第一尚氏一族の霊がまつられている。

尚巴志以下の第一尚氏の王たちの史跡や墓に対しては、第二尚氏王統

による何らかの圧力があつたとみられ、王たちの墓の伝承地は沖繩本島各地に散在しているようである。⁽⁴⁾しかし、幸いなことに、尚巴志の父尚思紹や祖父鮫川大主の墓や史跡群に対しては、第二尚氏王統による圧力はあまりなかったように思われ、現在でも佐敷には濃密な伝承世界が広がっていることが確認できた。

鎌倉芳太郎氏は「佐銘川大主は実在した人物と思われ」と述べているが、『中山世譜』巻四「尚思紹王」の項に「思紹之父。名叫「鮫川大主。」とあり、『琉球国由来記』巻十三「友盛ノ嶽御イベ」の項に「サメガト云ハ人ノ名也。此人、バテン巫父親ノ由」とあり、『遺老説伝』に「沙美川は、乃ち是れ場天祝女の父なり」とあることから、鮫川大主が実在したことは確かであろう。筆者は佐敷を歩いて鮫川大主の関連伝説と史跡群を調査して、鮫川大主が佐敷に残した痕跡の大きさに改めて気付かされた。そして、鮫川大主が佐敷で築いたものがあつたからこそ、第一尚氏の尚思紹・尚巴志父子による三山統一が達成されたのであろうという感想を抱いた。第一尚氏王統といえは尚巴志の業績のみが脚光をあびがちであるが、尚巴志の祖父鮫川大主の果たした役割に対して、もっと注目する必要があると思われる。

本稿では、佐敷の第一尚氏関連史跡群とその伝承を中心に考察したわけであるが、琉球王朝始祖伝説に関してはまだまだ未解明の点が多い。残された諸問題は今後の課題としたい。

〔注〕

- (1) 伊平屋島・伊是名島での調査は、六回にわたる。一回目調査は一九八六年八月、二回目調査は一九九〇年八月、三回目調査は一九九一年八月、四回目調査は一九九二年八月、五回目調査は一九九八年八月、六回目調査は一九九九年八月。また、佐敷町での調査は三回にわたる。一回目調査は一九八五年八月、二回目調査は一九八六年八月、三回目調査は二〇〇三年三月。伊平屋・伊是名・佐敷の一回目と二回目は、立命館大学説話文学研究会の昔話調査に参加しての調査で、伊平屋・伊是名の三回目と佐敷の三回目は原田独自の調査である。なお、昔話調査に関しては、拙稿「沖縄、伊平屋島・伊是名島の昔話」(奄美沖縄民間文芸研究)第一一号、一九八八・七)、立命館大学説話文学研究会編『沖縄・佐敷町の昔話』(佐敷町教育委員会、一九八九)、参照。
- (2) 伊平屋村と伊是名村は、合併の協議がなされている。
- (3) 佐敷町は与那原町・玉城村・知念村とで合併の協議がなされている。
- (4) 拙稿「屋蔵大主と鮫川大主―第一尚氏始祖伝説を中心に―」(奄美・沖縄民間文芸研究)第一七号、一九九四・七)。「沖縄県佐敷町における第一尚氏伝説―琉球王朝始祖伝説をめぐって―」(説話・伝承学)第一三三号、二〇〇五・3掲載予定)、参照。
- (5) 伊波普猷氏他編『琉球史料叢書 第四』(井上書房、一九六二)、四九頁。
- (6) 注4の拙稿「沖縄県佐敷町における第一尚氏伝説」参照。
- (7) 話者は沖縄県島尻郡佐敷町伊原の真栄城勇さん(T11・5・31)。
- (8) 平成十五年(二〇〇三)三月十一日・原田調査、採集稿。
- (9) 話者は沖縄県島尻郡佐敷町新里の山城清勝さん(T10・12・8)。平成十五年(二〇〇三)三月十日・原田調査、採集稿。
- (10) 『佐敷町文化財Ⅳ 第一尚氏関連写真集』(佐敷町教育委員会、一九九六)、六―七頁。
- (11) 『佐敷村文化財要覧 昭和五十年版』(佐敷村教育委員会、一九七五)、二三頁。
- (12) 『佐敷町文化財Ⅲ 佐敷町の文化財』(佐敷町教育委員会、一九八六)、三四頁。
- (13) 『佐敷町史2 民俗』(佐敷町役場、一九八四)、五九二頁。
- (14) 外間守善・波照間永吉氏編著『定本琉球国由来記』(角川書店、一九九七)、二九四―二九五頁。
- (15) 鎌倉芳太郎氏『沖縄文化の遺宝』(岩波書店、一九八二)、九七頁。
- (16) 注12の『佐敷町史2 民俗』、六二二頁。
- (17) 注12の『佐敷町史2 民俗』、六二四頁。
- (18) 話者は注8の山城清勝さん。平成十五年(二〇〇三)三月十日・原田調査、採集稿。
- (19) 話者は注7の真栄城勇さん。平成十五年(二〇〇三)三月十一日・原田調査、採集稿。
- (20) 注9の『佐敷町文化財Ⅳ』、八頁。
- (21) 注12の『佐敷町史2 民俗』、第九章「年中行事」の「伊平屋島拝み」の項、三八九頁。
- (22) 中公文庫版『折口信夫全集第十六卷』(中央公論社、一九七六)、所収。

- (23) 注13の『定本琉球国由来記』、二七八頁。
- (24) 嘉手納宗徳氏編訳『球陽外巻 遺老説伝』(角川書店、一九七八)、一六七頁。
- (25) 中公文庫版『折口信夫全集第十六巻』(中央公論社、一九七六)、五一頁。
- (26) 話者は注8の山城清勝さん。平成十五年(二〇〇三)三月十日・原田調査、採集稿。
- (27) 注9の『佐敷町文化財Ⅳ』、八頁。
- (28) 桑江克英氏訳註『球陽』(三一書房、一九七二)英祖王の項、一七頁。
- (29) 話者は注7の真栄城勇さん。平成十五年(二〇〇三)三月十一日・原田調査、採集稿。
- (30) 注11の『佐敷町文化財Ⅲ』、一二〇頁。
- (31) 注5の『琉球史料叢書 第四』、四九頁。
- (32) 話者は注7の真栄城勇さん。平成十五年(二〇〇三)三月十一日・原田調査、採集稿。
- (33) 成立年代未詳。琉球大学附属図書館蔵。写本。佐銘川大主、苗代大比屋、尚巴志、三代の略伝を記す。
- (34) 注9の『佐敷町文化財Ⅳ』、九二頁。
- (35) 注5の『琉球史料叢書 第四』、五四～五五頁。
- (36) 話者は注7の真栄城勇さん。平成十五年(二〇〇三)三月十一日・原田調査、採集稿。
- (37) 注12の『佐敷町史2民俗』、五一〇頁。
- (38) 注10の『佐敷村文化財要覧 昭和五十年年度版』、二六頁。
- (39) 注12の『佐敷町史2民俗』、五九四～五九五頁。
- (40) 注11の『佐敷町文化財Ⅲ』、八四頁。
- (41) 話者は注7の真栄城勇さん。平成十五年(二〇〇三)三月十一日・原田調査、採集稿。
- (42) 注11の『佐敷町文化財Ⅲ』、一一〇～一一一頁。
- (43) 東恩納寛惇氏「秘書「宝案」によつて確められた尚巴志王の墓」〔東恩納寛惇全集1〕第一書房、一九七八、所収。
- (44) 注9の『佐敷町文化財Ⅳ』、五三頁。
- (45) 當真莊平氏『月代の神々』(印刷センター大永、一九八五)。

〔付記〕沖縄県佐敷町での調査では、山城清勝さんと真栄城勇さんに大変お世話になった。記して感謝申し上げます。

本稿は、日本学術振興会平成十六年度～十八年度科学研究費・基盤研究C・研究課題「南西諸島における豪族伝説の調査研究」の成果の一部である。

(二〇〇四年十一月十日受理)

Summary

DAIICHI-SYOSHI's historic site group and legends in SASHIKI
Nobuyuki HARADA

DAIICHI-SYOSHI is the fourth dynasty of Ryukyu Dynasty. The king at the first generation of DAIICHI-SYOSHI dynasty is "SHOSHISYO". The reign of "SHOSHISYO" is 1406-1421. The king at the second generation is "SYOHASHI". The reign of "SYOHASHI" is 1422-1439. King SHOSHISYO's father is "SAMEGAWA-UFUNUSHI". "SAMEGAWA-UFUNUSHI" was born in IHEYA Islands, and came to SASHIKI. "SAMEGAWA-UFUNUSHI" made the base of the prosperity at the DAIICHI-SYOSHI dynasty. There are a lot of historic sites and legends that relate to DAIICHI-SYOSHI in Sashiki-cho, Okinawa Prefecture. In this thesis, the author researched the historic site group and the legends that related to DAIICHI-SYOSHI dynasty.